〈研究ノート〉達磨「面壁九年」異聞

西山美香

はじめに

禅宗の初祖・達磨大師は、インドから中国に渡来後、梁の武帝と会見、問答を行った。しかし武帝との機縁はかなわず、達磨は北へと去った。魏に赴き、嵩山少林寺に入って、無言のまま九年間も壁に向かって坐禅を組み、ついに悟りを開いた。その後、亡くなると弟子によって全身は熊耳山に葬られ、塔は定林寺に建てられた。その三年後、北魏の外交官の宋雲が西域からの帰途、葱嶺（パミール高原）において片方の履を持って西方へ帰る達磨と出会い、帰国後達磨の墓を明けると隻履のみが遺されていた、という。

あまりにも有名な達磨の伝説であるが、群書類従本『和漢禅刹次第』の「少林寺」の項には、次のような達磨の「面壁九年」についての異聞が記されている。

少林山崩　達磨到少林山、神不持、三崩山、人問其故、神曰、此山有大人、不堪持之、磨移潜山、面壁、少林二年、潜山七年、合九年、両山相去五百里、魏有岳山、岳山中有熊耳山、熊耳山中有定林寺、彼両処接二祖、

〔宮内庁書陵部蔵本による〕

達磨の「面壁九年」は、少林寺で九年間坐禅したのではなく、「少林二年、潜山七年、合九年」だったというのである。『景徳伝灯録』などの達磨伝には見えない内容であるため、これまで出典を探してきたところ、『五家正宗賛』

の日本における注釈書に酷似する記事を見いだしたので、本稿において報告したい。

一　『五家正宗賛』とは

本稿でとりあげる『五家正宗賛』について、『新版 禅学大辞典』において次のように説明されている。

四巻。宋、希叟紹曇撰。宋、宝祐二年（一二五四）序刊。七四人の禅者の機語を叙し、各伝ごとに四六文の賛を付したもの。日本では貞和五年（一三四九）の五山版を初め、慶長一三年本・寛永一一年本・万治三年本等しばしば刊行され、また末疏に、東陽英朝の〔抄〕、大圭紹琢の〔臆断〕など十数種あり、殊に済派の間で盛んに行われた。

現在、新型コロナウイルス感染症対策により図書館等の利用に制限が設けられているため、書籍とオンラインによって写真（影印）の閲覧が可能な以下の本を参照した。

A. 『五家正宗賛』

a. 五山版〔貞和五年（一三四九）〕

国立国会図書館蔵本

国立公文書館内閣文庫蔵本（紅葉山文庫旧蔵）

建仁寺両足院蔵本〔椎名宏雄編『五山版中国禅籍叢刊　三　燈史三』臨川書店（二〇一五）〕

b. 古活字版

①慶長一三年（一六〇八）花園・一枝軒版〔二冊〕

国立国会図書館蔵本
国立公文書館内閣文庫蔵本（和学講談所旧蔵）
京都大学附属図書館蔵本（永聖寺旧蔵）
西尾市岩瀬文庫蔵本

②慶長一三年（一六〇八）　中村長兵衛尉版〔四冊〕
国立公文書館内閣文庫蔵本（林羅山旧蔵）
花園大学情報センター今津文庫蔵甲・乙本
駒澤大学図書館蔵甲（東禅寺旧蔵）・乙（春光院旧蔵、三冊）本
西尾市岩瀬文庫蔵本

c. 製版
国文学研究資料館蔵本（寛永一一年、中野市右衛門版）
北海道大学附属図書館蔵本（無刊記）
カリフォルニア大学バークレー校蔵三井文庫旧蔵本（刊年ナシ、田原二左衛門版）

d. 写本
駒澤大学図書館蔵本（天喜寺旧蔵、室町末期）

B. 注釈書「五家正宗賛抄」

a. 版本〔芳野屋徳兵衛版　寛永頃刊〕
駒澤大学図書館蔵本（萬安英種撰）

b. 写本

①松ヶ岡文庫蔵本（妙心寺隣華院旧蔵）〔『禅籍抄物集　松ケ岡文庫所蔵　第二期』岩波書店（一九七七）〕
②駒澤大学図書館蔵甲本（室町末期）
③駒澤大学図書館蔵乙本（妙心寺隣華院旧蔵、大圭紹琢撰　天正年間）
④西尾市岩瀬文庫蔵甲本（九九・九一　慶安四年の奥書あり）
⑤西尾市岩瀬文庫蔵乙本（一五一・八九　享保一九年の奥書あり）
⑥東京大学史料編纂所蔵本
⑦国立国会図書館蔵本
⑧無着道忠註『五家正宗贊助桀』
※Ｂａ（版本）はＢｂ②（写本）を版行したもの。
※Ｂｂ①②「宗源余滴」、Ｂｂ④⑤⑥はそれぞれ同系統。

『五家正宗贊』とその注釈書については古田紹欽氏の研究[1]があり、それに導かれて日本への将来、開版の経緯について確認したい。

『五家正宗贊』は南宋の希叟紹曇（生没年未詳、無準師範の法嗣、白雲慧暁の宋での師）によって杭州霊隠寺において宝祐二年（一二五四）に著された。貞和五年（一三四九）に春屋妙葩（一三一一～八八　夢窓疎石の法嗣）が天龍寺雲居庵で刊行（五山版）。その後古活字版（慶長四年）・製版が刊行され広く流布し、講義が行われ、多くの注釈書も作られた。

『五家正宗贊』が日本に伝わったのは、その注釈書である「正宗贊抄」において次のように記されているように、大応国師南浦紹明（一二三五～一三〇九）の「時代」というのが定説とされている。

Ｂａ・Ｂｂ②「此録ノ日本へ渡ル事ハ横岳開山大応国師時始而渡也」（巻頭）
「此録ハ日本へ渡ル事ハ横岳開山大応国師之時初テ渡ソ」
Ｂｂ①「此録ハ日本へ渡ル事ハ横岳大応国師之時、初テ渡ソ」
Ｂｂ④「此録ハ日本エ渡ル事横岳国師ノ時初テ渡ソ」
Ｂｂ⑤「此録ハ日本エ渡事ハ横嶽国師之時初テ渡ゾ」
Ｂｂ⑥「此録ハ日本エ渡ル事ハ横岳国師時、初テ渡ソ」
Ｂｂ⑦「此録日本ニ渡ハ大応国師之時分也」
Ｂｂ⑧「旧解曰、此書横嶽ノ大応国師入唐而初テ将来ス」

Ｂｂ⑧無着道忠は、南浦紹明その人が日本に将来した、という説を記しているが、古田氏によれば松ヶ岡文庫が所蔵する別の写本「正宗賛抄」に「或正宗賛日本ヘハ横岳開山大応国師帰朝ノ時持来ト云、又ハ大応ノ時代ニ渡タトモ云」という記事があり、当時よりどちらとも決せないと考えられていたようである。(2)

また同写本には「其時ノ真本在嵯峨鹿王院ト云、其本ハ希叟ノ真筆ヂヤト云如何」とあり、これを信じるならば日本に渡った『五家正宗賛』は著者の希叟紹曇の真筆本で、京都嵯峨鹿王院の所蔵となり、鹿王院を開いた春屋妙葩がそれを開版したということになる。

二　「正宗賛抄」に見える達磨「面壁九年」伝説

達磨のもっとも有名な伝説に、「嵩山少林寺において、経論を講ぜず、仏像を礼せず、終日壁に向かって端坐すること九年」（『新版　禅学大辞典』）という、いわゆる「面壁九年」伝説がある。

『五家正宗賛』の当該部分の本文を示す。

初至見梁武帝、帝問如何是聖諦第一義、師曰廓然無聖、帝曰対朕者誰、師曰不識、帝不契、遂折蘆渡江至少林、面壁九年、得二祖於深雪中、（略）師入滅後、葬于熊耳、後宋雲使西域還遇師於葱嶺、見師手携隻履而返、帰奏帝、開壙果見空棺隻履存焉、〔五山版による〕

初め至って梁の武帝に見ゆ。帝問ふ「如何なるか是れ聖諦第一義」、師曰く「廓然無聖」。帝曰く「朕に対する者は誰ぞ」、師曰く「不識」。帝契はず、遂に蘆を折って江を渡って少林に至り、面壁九年。二祖を深雪の中に得たり。（略）師入滅の後、熊耳に葬る。後に宋雲西域に使して還る。師に葱嶺に遇ふ。師を見るに手に隻履を携へて返る。帰って帝に奏す。壙を開くに果たして空棺隻履の存するを見る。

『五家正宗賛』の注釈書「正宗賛抄」の一部の本には、「面壁九年」について以下のような註が記されている。

ア．Ｂｂ④⑤⑥

至少―　或説云、少林二年定林七年共九年云々、少林定林在一所歟、

イ．Ｂａ・Ｂｂ①②

至少―　或説云、少林二年定林七年共九年云々、少林定林在一所歟、

面壁　「智渓集」云、達磨到少林山神不持、三崩山人問其故、神曰、此山有大人、不堪持之、磨移潜山面壁、少林二年潜山七年合九年、両山林去五百里、魏有岳山、岳山中有熊耳峰、熊耳峰中有定林寺、彼両処接二祖、又「春渚紀聞」ニハ作十年面壁、

ウ．Ｂｂ⑧

面壁九年　「智渓集」曰、達磨到少林山神不持、三崩山人問其故、神曰、此山有大人、不堪持之、磨移潜山面壁、少林二年潜山七年合九年、両山相去五百里、魏有岳山、岳山中有熊耳峰、熊耳峰中有定林寺、彼両処接二祖、

群書類従本『和漢禅刹次第』の「少林二年、潜山七年、合九年」という記事は、イ・ウ「正宗賛抄」が「智渓集」（未詳）から引用した部分とほぼ同文であることが判明する。

またア・イ「正宗賛抄」によれば「面壁九年」には、「少林二年・定林七年」という別の説もあることがわかった。そしてイ「正宗賛抄」が参照する「春渚紀聞」によれば、達磨が少林寺で悟りを開いたという面壁坐禅はそもそも「九年」ではなく、「十年面壁」であったとする説も存在したことがわかる。

このように達磨の「面壁九年」について、異聞ともよべるような、さまざまな説が紹介された背景には、日本の禅僧たちの達磨の坐禅に対する強い興味・関心があったことが推測される。禅が坐禅こそを基本的な修行と位置づけるその根拠が、達磨の「面壁九年」の故事に象徴されていることをふまえれば、「面壁九年」にさまざま異説が生み出され、記録されたことが理解されるように思われる。

〈註〉

（1）古田紹欽「解題」『禅籍抄物集　松ケ岡文庫所蔵第二期』岩波書店（一九七七）。

（2）（1）において古田氏は「希叟に師事することのなかった南浦に託して、この『賛（五家正宗賛）』の我が国への将来をいっていることは、この『賛』を「我門下」（叢林に対する南浦の法系）に関係づけようとした牽強附会の説ではなかろうか」と述べている。

（花園大学　非常勤講師）